
Physical Graffiti

浮浪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Physical Graffiti

【Zコード】

Z0178F

【作者名】

浮浪

【あらすじ】

今までの人生はみんな嘘だ。本間は人生を変えるため、これまでの屈辱を払拭するために、東京の地で歩き始めた。右手でギターをかつき、左手に自尊心を握り締めて。

カーテンの隙間から差し込む陽光と、すずめのほがらかな鳴き声が爽やかな朝の到来を告げている。

本間はカーテンをぴつたりと閉めなおし、すずめを罵倒するとベッドに潜り込んだ。

少しでも寝ておかなければいけない。第一印象で元気なさそうとか、暗そうなんてレッテルを貼られたらたまらない。

本間の心に一抹の不安がもたげた。今僕はどんな顔をしているのだろ？

本間は枕元に常備してある手鏡で自分の顔を恐る恐る覗いた。

ひどい！！顔の造りではない。いや、もちろん顔の造りもかなりひどいのだが、それ以上に目の下を覆つたくま、自己主張するニキビ、ザラザラするそばかす。顔全体が赤く目の下だけが黒い。不健康な病人に見える。

昨日はここまでひどくなかったのに。

今までの努力はなんだったんだ。少しでも見たくれを良くしようとかツラーメンや焼肉を我慢して、まずいほうれん草やピーマンを食し、ビタミン剤だって毎食後飲んだ。それなのになんだこの顔は。

もう休んじゃおうかな。本間の心に弱気の虫が湧いた。

いや、駄目だ。ここで休んだら今までと一緒にじゃないか。本間は小さく雄たけびをあげ、ベッドから起き上がり顔を思い切り叩いた。

今日は、入学式が終わって初めての登校日。学内で行われる出来事の全てが本間にとつて初めての経験になる。

初めてクラスメートと対面し、初めておしゃべりをする。そして初めて友達になつて、初めての連れショノ、初めての昼食だ。

本間の頭には授業の選択や単位のことなど頭になかった。あるのは友達、あわよくば女友達を作ること。そして、バンド。

バンドを作つてみんなの前で演奏する事。これが本間の大学生活の目標であり、夢であつた。

中学、高校と憧れながら、誰もバンドに誘ってくれなかつた。楽器をやつている人間が周囲にいなかつたのもあるが、そもそも友達が一人もいなかつたのだ。

学園祭で行われる即興で組んだような「ピーバンドを見る度に、本間は歎きしりした。

僕の方がずつとうまい。ずつと、ずつと、こんな奴等よりずつとうまいのこと、歯肉から血が滲み出るほどに本間は口惜しがつた。

そして妄想した。僕だったら、ラ○クやオ○ンジ○ンジなんかやらない。やるのは決まってるレッズショッペリンだ。

僕はジミーページだ。本間はジミーページになりきつ悦に入る。と

いつも身長170に満たないずんぐりむつくり体型である本間は、ジミー・ページの体に自分の顔だけ置き換えて夢想するのだ。

曲田はアキレス最後の戦い。ジミー本間は長い腕を振り回してギターをかづぴくのだ。

曲の終わりはマスター・ページの終わりに似ていた。虚脱状態に陥り、自分を惨めに感じる。

自分はジミー・ページではなく、本間史明。トップに君臨するロックスターではなく、教室の底辺に属する劣等生なのだ。

それでも本間はシコシコシコシコ練習してきた。ちんこをシコシコすることもたまにあつたが、それの何百倍もの時間をギター相手にチョメチョメしてきた。

その結果、今現在のジミー・ページでも完全再現するのは難しこと言われるインプロヴィゼーション〔即興演奏〕を完全「ペー」するまでになつた。

大学は高校とは桁が違つ。より多くの友人を得る為。そしてよりレベルの高い音楽をする為にわざわざ本間は東京に出てきたのだ。

THE BEGINNING (前書き)

始まってしまった大学生活、本間の運命やいかに。

THE BEGINNING

これが僕のクラスメートなのか。

本間は感慨深く周囲を眺めた。

クラスと言つても、高校などとは違い、あくまで学校側が管理する為のものなのだが、一年時にはクラス対抗球技大会や親睦会などが催される。

それらを説明するためのオリエンレーションの為に、本間を擁する1・Fはある一室に集められていた。

みんなオシャレでスタイリッシュな格好をしている。本間もファッショングに載っていた通販で上から下まで買い揃えたのだが、なにかが他のクラスメートとは違った。

形は一見同じなのだ。細身のジーンズにダークカラーのタイトなシャツ。インナーにはタンクトップ。

しかしそく見ると、本間が着ている洋服はおかしな点が多くあった。例えばジーパンの尻ポケット部分に施されたチューリップのアップリケ。シャツの胸部部分についた用途不明な大きいボタンや斜めに入ったチャック。タンクトップに描かれた風船ガムを膨らませた子供。とにかくunnecessaryなものが多く、とにかくダサかった。

本間は周りと自分を見比べて、初めてそのことに気づいた。

なんなんだ、この風船ガムを膨らませたアメリカナイズされた子供

は。

本間は開いてきたシャツのボタンを全部閉めた。しかし今度はシャツが気になる。

なんでこんな所にボタンが！？こんなところにチャックまでついてる。

本間はすぐさまシャツを脱ぎ捨てた。しかしそうすると、再び風船ガムを膨らませた子供が出てくることになる。

このくそガキが、本間はパニックに陥った。どうしようどうしよう。

本間はとっさにタンクトップを裏返しにした。幸運なことに厚手の生地だったので、風船ガムを膨らませた子供はまったく見えなくなつた。

ふう。助かった。本間は大きく息をついた、瞬間、不穏な気配を感じた。

うつ。この感じは！？

本間は周囲を見回した。すると、派手な女学生一人が本間を見て笑っている。

それは本間が長年慣れ親しんできた蔑みの眼差しだった。

彼女たちは自分の一連の行動を見ていたのだろうか？

見ていたに違いない。じゃなければなぜ僕を見て笑うのだ。

本間はお腹を押された。お腹が痛いわけじゃない。あくまで演技だ。

あー、お腹痛い。いてててえ。

そう言って、本間は教室を出て行った。

教室では女たちの笑い声が響いていた。

「あのチューーリップのアップリケのちの母親とおやうなんだけど、チヨー受ける」

「まじで、それやっぱくない」

ぶひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ。

本間はトイレの個室でうなつていた。あくまで演技である。

女たちが男に頼んで偵察させているかもしれないからだ。

本間がうんうんと声に出して唸った。そうしたら間違つて本当に肛門に力が入つてしまつて、便がポロリと出でてしまった。

ズボンは履いたままである。

本間はズボンとパンツを同時に脱ぎ、中を確かめた。

零れ落ちた便是不幸なことに粘り氣があり、パンツにびっちょりと付着していた。

本間は詰まらないよつこと願いながらパンツごとトイレに流した。

問題はズボンだった。

ズボンも残念ながら便に犯されていた。チューーリップも侵食され、鮮やかな赤色が茶色く濁て、腐った落ち葉にしか見えなくなっていた。

それを見て本間の心は折れた。

もう、帰ろう。

本間の大学生活は前途多難なようだ。

Good times Bad times（前書き）

構内でウンコを漏らした本間は家に引きこもった、しかし、そこで本間は終わらない。自分との戦いに打ち勝った本間は再び歩き始める。そして出会った「ロックンロール研究会」果たして本間に光は差すのか

Good times Bad times

本間は震えていた。

本間は悩んでいた。

開けるべきか否か。

いや、開けるべきに決まっている。開けない方がよっぽど不自然だ。
でも・・・

怖い。

本間は扉のドアノブを握つては放しを十分以上繰り返していた。部屋の中からはグルービーな演奏が聞こえてくる。

かつこいい。本間は素直にそう思った。早く入つて近くで聞きたい。
本間は一気に至るまでの経緯を思い出し、自分の正当性を確認しうとした。

本間は友人を作る第一の機会を既に失っていた。クラスメートという一番はじめに接することになる人種とのコンタクトに失敗したのだ。

ウンコのせいで。

先日トイレでウンコを漏らしてしまった本間は、なんとか人目を避

けて、ウンコ漏らしをばれることなく家路についた。まではよかつたが、元来の悪癖の一つである被害妄想にとり付かれてしまった。

次の日に大学に行った本間であつたが、胸中穏やかではない。

「みんな僕を見て笑つている。ああ、今すれ違つた女の子が僕を見てウンコって言つた」

常識的に考えれば、たとえウンコを漏らしたことを知つていたとしても、露骨に笑つたり、ウンコ呼ばわりする奴は滅多にいないだろう。

しかし、友人と呼べる存在が中高を通して一人もいなかつた為、そういう一般的な感性が欠落しているのだ。

「もう駄目だ」

絶望に飲み込まれ、本間は自分の部屋へ引きこもつた。そこで、本間は葛藤した。

「このままじゃ、今までとなにも変わらない。ずっと一人ぼっちで生きていくのか・・・そんなのいやだ」

「でも、誰がウンコたらしと友達になりたいって思つんだ。一緒にいて、ウンコたらされたらどうするんだ」

ウワ――――――――――――――――――――――――――――――

苦惱、悶絶。苦惱、死のう。いや、生きよう。本間はどうにかこうにか自分との戦いに打ち勝つた。

ウンコ漏らしてなにが悪い。おまえらだつて子供のこなはしじつちゅう漏らしてたじやないか。笑うなら勝手に笑え。

本間は強くなつた。しかし、そこまでの心境に行き着くまでに一週間もの時間をしてしまつた。

授業の選択等は母親がわざわざ東京に出てきてやつてくれた。

情けなかつた。感謝した。変わらなければいけない。本間は強く思つた。

大学に行つた。クラスごとに行われている英会話の授業に出た。教室の中に知つた顔は一人もいない。当たり前だ。

他の生徒達はそれぞれグループになつて楽しげに談笑している。

本間に話しかける者は最後までいなかつた。

落ち込んだ気分であてもなく校内を歩いた。こんななんじゃ駄目だ。そう思つて顔を上げた、その目の前にカオスティックなチラシが貼つてあつた。

ジョニー・ロットンとフレディーマーキュリーがマイクを持つて歌つているその後ろで、なんとジョンボーナムがドラムを叩いているのだ。

その上に白文字で

「ロックンロール研究会」

ロック好きな奴らが集まつて、語つたり、バンドやつたり、イベン

ト打つたりします。

初心者

歓迎。口ッケ黒鹿集まれ――――――――――――

連絡先 代表 福部芳郎 090-0001-0000

と書かれていた。

本間の胸は恋する乙女のように、独身イケメン弁護士と知り合つた
独り身三十過ぎ女のようにときめいた。

「これだ。これしかない」

本間は九割九分空白の手帳を取り出して、チラシに書いてある電話番号を書き込んだ。

よし、善は急げだ。早速電話しよう。

本間は全力で家に帰った。携帯を持つていのを少し後悔した。親にいらないのかと問われたが断つてしまつた。携帯がうんともすんとも言わず、孤独を実感させられることが恐れたのだ。

家に着き電話に飛びついた。びくつく手でなんとか番号をプリッシュするとなぐに相手が出た。

「はい、もしもし」

遊び人のような軽い口調で福部芳郎が電話に出た。

本間は名前から、眼鏡をした堅い感じをイメージしていたので動搖した。

「あ、ああああああああ、チラシを見たんすナビ」

「あー、はいはー。新入生ね。見学希望でしょ？」

「え、えーと、は、はー」

本間は見学などとこひ行為をするとは思つてもみなかつた。

「じゃあ、今週の金曜の三時から俺らが部屋で練習してつかうかな
よ。オッケー?」

「あ、ああはい。オッケーです」

「はーい。じゃあね」

「はーい、はーい。わようなり」

話しが急展開しそぎて、頭がぼやけている。本間はもつと懇懃に規則とか、注意事項とか、今こんなバンドがいますといった説明などを受けると思つていたのだ。

「でも、これで一步前に進んだ」

そう考えると本間は無性につれしくなつた。無意味に飛び上がつたり、レスポールギターを首からかけて回したりした。そして

「イエ—————...」とロバートプリントぱりにシャウトした。

「やうだ。そもそも僕は約束してゐるんだ。なにをためらひことがあるんだ」

本間は回想を終えて心が軽くなつた。

「なにも難しく考へることはないんだ。ただ、」のドアノブを回せば、中で演奏している福部さんが僕を歓迎してくれる

ドアノブに手をかけ、二回せんとしたその瞬間、本間の体は後方へぶつ飛んだ。

「てめえ、いい加減にしろよ、」の野郎
皮ジャンを着たリーゼント頭の「」つい男が本間を見下ろし、怒氣を含んだ声で言い放つた。

本間はなにがなんだか分からずおろおろするしかなかつた。

「おまえまじで死にてーのかよ」

リーゼントが拳を突き出して言つた。

本間はピンクローターぱりの振動で首を左右に振つた。

Face To Face

「てめえいい加減にしろよ。ストーカーサイコ野郎」

マザファットカーと叫ぶと同時にリーゼントは壁を殴りつけた。

それは主に、本間を恫喝する目的で行われた行為だったが、効果はできめんだった。

本間の股間に小さな水たまりが出来た。

「この人は僕を誰かとまちがつている。それを教えなれば誤解を正さなければ」

「ほほほほほほほほ僕じやないんです」

あ～～～～ん。
なめてんのか、じり

だから僕じゃないんだってば」「あなたが違うんですね」

「なんだてめえ、その口のききかたは」

本間のセリフがさらにリーゼント男の怒りに火をつけたようだつた。

「違ひなんだ。僕じゃない。なんとかして分かつてもらわないと」

「元々は必死に抗弁しようとしたが、舌がくらげに刺されたよう」一切回らない。

「まだだ」

ある一定以上の緊張状態に置かれると、本間の舌は働きを一切やめてしまうのだ。それはこれ以上被害を大きくしないための自衛手段のようでもあり、大脳に対するストライキのようにも思えた。

初めてそれが起ったのは小学二年生の時で、国語の教科書に出てくる、父、という発音をどうしてもスムーズに出来なかつた。

突つかかりながら、ちちちじち、なんどもると、クラスで笑いが巻き起こり、本間はただ赤面して教師の着席の許可を待つしかなかつた。

再び本読みに当たられた時、本間の舌はだんまりを決め込んだ。

それ以後も何度も同じような状態になり、その度に本間の自尊心は損耗していった。

「なにやつてんの」

さつき本間が何度も開けようと試みて頓挫したドアから、すらりとした女性が出てきた。

「なんてきれいな女性だ。いや、きれいだなんて月並みな言葉じゃ足りない」

瓜実型の小さな顔に収まつた切れ長の大きな瞳。ほどよく丸みを帯びた唇。欧米人のようにまっすぐに通つた鼻梁。肩下まで伸びた艶のある黒髪。

「女王様」本間の頭に、むかし、映画で見たクレオパトラが浮かんだ。

「い、いや。輝美さんのストーカーがまたうろちょろしてたんで懲らしめてたんですよ」

リーゼントが頬を赤らめてクレオパトラに言った。

「いい加減にして。ストーカーはあんたでしょ。ちゅうどデビット」

呼ばれて出てきたのは金髪でサングラスをした細身の若者だった。

「まためえか」

「いつやいなや、デビットのパンチがリーゼントの鼻つ柱を捉えた。

「ぶひえひえひえひえ」

リーゼントは後ろへぶつ飛び、そのまま動かなくなつた。

「なんてかっこいいんだ」

本間は憧れを持つてデビットを見つめた。

視線に気づいたのかデビットが本間に近づいてきた。

「お礼を、お礼を言わなくては。それと後で果物でも、いや、ここは気を利かしてピックでも持つていけば仲良しくしてもらえるかも」

「おまえもあこいつの仲間か」

「くつ

否定する間もなく、デビットのパンチが弧を描いて向かってきた。

バキッ！！

痛いと感じる前に本間は氣を失って膝から崩れ落ちていった。

Cold World (前書き)

保健室で目覚めた本間。勃起！！

「うーん、どうも、このページやマニアが一体なんだ。」

「あら、目が覚めたのね」

本間の目の前に白衣を着た女性が立っている。

「なかなか起きないから、心配しちゃつたわよ」

一体この女性はなにを喋っているんだ。本間は周囲を見回した。

本がぎっしり詰まつた棚に、薬品らしきものが並んだラック。ドアを開けてすぐのところに机と椅子が置かれ、本間が今寝ているベッドが窓際に配置されている。

この景色は見たことがある。それもなんども。そう！保健室だ。

本間は中学生の一時期、俗に言う保健室登校児だった。

じゃあ、この人は森先生！？

やさしくて、いつも弱音を吐いた僕を励ましてくれた森先生。笑顔で包み込んでくれた森先生。でも僕はもう高校生。いやもう大学生のはず。

「森先生なんで大学に？ひょっとして僕を心配して来てくれたの？」

本間はうれしさのあまり白衣の女性に抱きついた。

「先生、先生。うれしいよ、先生とまた会えるなんて」

本間は中学生の時のように森先生の胸に顔をうずめた。こうすると森先生は太い腕で本間を抱きしめ、頭をやさしく撫でてくれたのだ。

「ちよつと、やめなさい。だれか、だれか助けて」

「先生先生。なんで？昔みたいに良い子良い子してよ」

本間に細く長い手が伸び、本間の体は強い力でベッドに叩きつけられた。

「なにやつてんだよ、糞ボウズ！」

彌りの深い長身の若者が本間を見下ろしている。

この人は・・・テビット!!

あああああ
あああああああああああああああああああああああ

本間は全てを思い出した。殴られるまでの一部始終をさつせつと
あつとい。

じゃあ、森先生はなんで。

床に座り込み、震えている白衣の女性は森先生……ではない。それは見たことない女性若い女性だつた。

わわわわわわ

おわわわわっわわわわっわあわわっわわわわっ

本間は羞恥心やら罪悪感やら性的興奮やらでパニックに陥った。

「違つんで。ちちこちちちちち違つんです。あ、あああああああ、いやああああああああ」

「おい、落ち着けや」

本間の頬に張り手が飛んできた。

鋭い痛みで本間は我に返った。

「ああ、すいませんでした」

本間はベッドに額を擦りつけんばかりに頭を下げる。

「なんでお前があやまんだよ。あやまひなきやいはないのせいか
だぜ」

「いえ、とんでもあつません」

本間は背筋を正し、恐縮した。

「本間だろ。本間史明。臨床心理学科一年。見学の電話くれたのお前だろ」

デビットは本間の学生証を振りながら言った。

「勝手に財布開けて見ちまつた。」「みんな。おじでやばかつたら親とかに連絡しなきゃいけないからね」

「すいませそ。ありがとうございます」

本間は再び深く頭を下げた。

「だからもうこのひのこいつての。悪いのは俺なんだから。説びといつちやなんだけどや、今度サークルで飲み会があるんだよ。そこには来いよ。奢つてやる。んでみんなに紹介してやるよ」

本間は緊張で固くなり頷くしかなかつた。

「ああ、後遅くなつたけど、俺、ロックンロール研究会の部長やってる福部芳郎つちゅうもんだからよろしく頼むわ」

セツヒツヒ、テレビット」と福部芳郎は部屋から出て行つた。

かつこここ。かつこ良過だ。

本間は同性愛的恍惚感に浸つた。

「あ、あの。具合よくなつたんだつたら、出で行つてもひりますか

怯えた田で白衣の女性が言つた。

「ああ、すいませんでした」

そう言いながら本間は少し得意気になつていた。テレビットが飲み会

に招待してくれた、その高揚感がある種の万能感を本間に与えている。

僕が抱きしめたせいでこの女性はこんなに怯えている。

本間に中に眠つていたサディスティックな一面が芽を吹いた。

ポケットについた名札をちらりと覗くと、大友可奈子と書いてある。

「今すぐ出て行きますよ、大友さん」

大友可奈子の体がびくっと震えた。

それを見て、本間に中にえもいわれぬ快感が走った。

この女性は僕を恐れている。僕もデビットさんのようにかつこじょく立ち去るつ。

見られていることを意識して部屋を出て行こうとする本間に大友可奈子が声をかけた。

「あの、パジャマは置いていいともうれますか。それとこれ

大友の手には股間部分に大きな染みを作った本間のジーパンがあつた。大友はそれを汚物でも扱うかのように親指と中指でつまんで本間に投げてよこした。

目の前の屈辱を契機として、本間を今まで支配していた強気の虫がどこかに雲散し、いつもの本間がねぐらに帰ってきた。

「あああ、すいません。」めんない。今すぐ着替えます

もたつき、転びそうになりながらズボンを脱ぐ本間。それを大友可奈子は、零下49度の瞳で見つめた。

Mr. Drunker (前書き)

酒乱でarcyません。いや、むしろ生まれて来て下さいません。酒が引
き起します悲劇。いや、むしろ喜劇。勃起。

「カンパニー」

各々が自分のジョッキ、またはグラスを近隣の人間とぶつけあう。それは日本中で毎日見られる日常的な光景だが、本間にとつてそれは未知の世界、未体験ゾーンだった。

居酒屋田吾作の個室二つをくつつけた空間に、ロックンロール研究会の部員と入部希望の新入生、合わせて四十人がごったがえしている。

どうしたらしいんだ。

さすがの本間も、乾杯が互いの飲み物が入った容器をぶつけあって敵意がないことを確かめ合つ、催しのはじめに行われる行事だとうことは分かつている。

しかし頭で分かつているだけで、経験は皆無。どのぐらいの強さで、どのような表情で、なにより誰とやればいいのか皆田見当がつかない。

回りはほぼ全てが初対面。知っているのはロックンロール研究会の部長であるデビットこと福部芳郎と、クレオパトラのような風貌をしたきれいな女性だけ。

ああ、どうしたらしいんだ。

本間はレッド・シッシュ・ペコンのハイブを追いかけたドキュメントロードを思い出した。

そこでジニアーページは長い腕を振り上げるようにして、グラスをかげていた。

あれを真似しよう。

本間は短い腕を精一杯伸ばして、シャウトした。

「カンペニー」

決まった。初めての乾杯にしては上出来。いや、かなり才能を感じさせるものだったのではないだろうか。

周囲を見回す。みんながあ然とした表情で見ていた。

「いまさら乾杯って。さつきやつたじやん。しかもなにかっこひけでんの」

本間の隣に座っている太めの女が誰ともなく呟いた。

「なんで腕振り上げてるんだよ」「ロックスター気取りかよ」

居酒屋田吾作の個室に嘲笑が渦巻いた。

ま、またやつてしまつた。

本間は赤らんでいく顔を止めることが出来なかつた。

「だつせえ」「なに考えてんだよ」「空氣読めよ」「俺の靴舐めろよ」「うんこしたのが」「糞野郎と酒なんて飲みたくねえよ」

虚実入り混じつた声が本間の鼓膜に襲いかかる。

ああ、もう駄目だ。逃げよう。席を立とうとした本間の肩をデビットの手が押し戻した。

「！」こつおもしれえだろ。俺のダチなんだ。よろしく頼むよ

デビットの一聲で嘲笑ピタッ！が止んだ。気がした。

さすがは部長だ。すばらしい。

本間は潤んだ瞳でデビットを見つめた。

「じゃあ、今日は新入生歓迎会つてことだから自己紹介してこいつか。まず俺から福部芳郎。部長やつてます。後、the maraca つてバンドでベース弾いてます。よろしく！」

デビットが立ち上がり、歓声と拍手が同時に沸き起つた。

「じゃあ次は・・・おまえから行けよ。おまえから順番にさ」

デビットが指したのはクレオパトラだった。クレオパトラはめんどくせんうに立ち上がり

「白井忍です。デビットと同じバンドでボーカルやつてます。ちなみにデビットつてのは部長のことね。デビットボウイに似てるから」

「付合つてるんですか？」

いかにも軽薄そうな茶髪がアホ声で言つた。

その間に白井はフツと笑つて、「秘密」とだけ答えて座つた。

再び歓声と拍手が部屋を埋める。「じゃあ、次は俺だね。俺は・・・

・」

部員が順に自己紹介をしていく。しかし、本間の耳には一切入らなかつた。

やつぱり一人は付き合つているのか。いや、でも秘密つて言つてた。付き合つてたら秘密にする必要なんてないんじやないか。でも、付き合つてないのなら、なんで秘密なんて疑いを誘うよいつなこと言つんだ。うーーーー、分からぬ。

本間は目の前にある飲み物を飲んだ。それは初めて本間の体内にアルコールが入つた瞬間であつたが、本間はそれがアルコールであると気づかなかつた。それほどに本間の心は乱れていた。

別に白井さんとデビッドさんが付き合つてたつて関係ないじゃないか。僕にはなにも、なにも関係ない。なのに、なのに、なんでこんなに苦しいんだ。

本間は目の前にある、余分に注文してあつた生ジョッキやカクテルを飲みまくつた。

なんだよ。ちくしょう。なにがデビッドだよ。ふざけやがつて。俺様の顔をぶん殴りやがつて。

中生3杯、ジントニック2杯は本間の酒乱の血を呼び覚ますのに十分な量だった。

自己紹介は既に新入生に回つており、さつき白井に付き合つてゐるのかと問うた茶髪がにやけ面で発言していた。

「えーと玉口裕也です。趣味は・・つてか音楽ですよね。」のサー
クル入つてるんだから。出身は神奈川県です。ちなみに今フリーな
んで彼女募集中です。すっげ大事にするんでお願いします。ちなみに
に年上好きつす。ぶつちやけ白井さんとかチョータイپつす。好き
な音楽は、DR、とか、あつ、ドラゴンアッシュのことつす。あと、
オレンジレンジとか、B-2なんかも結構聞きます。よろしく〜！

歓声、拍手。それにはやしたてるよくな口笛が響いた。

「つまんねー」と呟つてゐるんじやねえよ」

本間の口から発せられた重低音が明るい空気を引き裂いた。

本間は目の前の長テーブルをひっくり返した。

女の子の悲鳴があがる。

「キャアー。ワタシのフレッシュ・サラダが」

「そんなもん俺がもつとフレッシュにしてやる」

そつとうと本間はパンツとズボンを同時に下ろしそのサラダの上に大便をひねり出した。

あやああああ つおおおおおおおお おええええええ

本間は暴れまくった。自分がひねり出した糞を両手に持ち、女、男 かまわずぶつけまくった。

居酒屋田畠作の個室は狂乱に包まれた。本間にとつてそこはウッド ストックだった。

「おめえいい加減にしろよ」

デビットは本間の胸倉を掴んだ。本間はその手を逆に引き寄せ、頭 突き一発。デビットは意識を失い、その場に倒れこんだ。

そのデビットを本間は抱えあげ、イングヴェイマルムステイーンば りにギターに見立てて振り回した。

「オーエス、オーエス！！」

デビットのズボンを下ろし、チンコをトレモロアームに見立てて上 下に動かす。

「イエ――イ――イヤ――――――オ――」

「トビットは何度も振り回されたため、口から泡を吹いている。

「うおおおおおおお。一晩中いぐぜええ！…っておわあああ

永遠に続くかと思われた狂乱は、元ラグビー部の西酒屋店員永田のタックル一発であっけなく終焉した。本間は頭を打ち氣を失つてのびている。もちろん糞はついたままだ。

この事件は四月の悪夢として長く語り継がれることになる。

ロックンロール研究会の恥部として

伝説のバンドの幕開けとして

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0178f/>

Physical Graffiti

2010年10月31日04時19分発行